



Title	マホメット物語(続) : 政治家として
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 1994, 11, p. 155-176
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79648
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マホメット物語（続）—— 政治家として

勝 藤 猛

Muhammad (continued) —— A Statesman

Takeshi KATSUFUJI

The opposition against the new religious movement initiated by Muhammad in Mecca was comparatively mild, as Muhammad and most of his followers were protected by their own clans. In order to seek better progress and success, they had to find a missionary base elsewhere. Muhammad met visitors from Medina, who appealed to him to be an arbitrator in the feuds which were for years current among rival clans. He accepted it in expectation of gaining cooperation from local Jewish inhabitants whose monotheistic faith was common.

In summer 622 the Muslims, about seventy in number, left their hometown for the Medina oasis, 400km to the north. The first task for the Prophet there was to find a means of livelihood for his followers. Without agricultural skills and commercial resources, the only remaining profession for them was making predatory raids on merchant caravans. They succeeded in expeditions of this kind at Nakhla in January and at Badr in March, 624. While the Meccans won a military victory at the siege of Medina in March 625, they failed in destroying the Muslim community that was settled there.

In the course of time, Muhammad broke with Jewish clans and expelled them one by one. In some of his political activities, Muhammad resorted to such inhuman means as assassination and massacre. He had, moreover, upper hand over the Meccans due to bribing nomadic tribes and inviting them to support the Muslims. The completion of Muhammad's religious and political career was brought about in January 630, when he conquered Mecca without bloodshed and made it the capital of an Islamic state.

1 メッカでの迫害

マホメットの宗教運動に、メッカの人々はどうか対応したか。彼に反対したのはメッカの支配者たる古い世代ではなく、彼と同年代の人たち、例えば Makhzûm 家の Abû Jahl であった。新運動がもたらす影響は、この人々にとってより大であると感じられたからである。古い世代は安定を求めて双方の妥協を願っていた。

マホメットのおじのひとりに Hamzah という者がいた。貧しくて気短かで、酒好きというから、社会的地位は高くなかったろう。しかし勇敢で積極的な男であった。彼が砂漠での狩りから帰る途中、アブー・ジャフルが、彼の甥つまりマホメットを侮辱した、と人から聞いた。彼は怒ってジャフルを探し出して訪問し、持っていた弓で叩いた。ここで氏族同士の大騒動が始まるところだが、ジャフルが自制して自らの非を認めたため、大事に至らずにすんだ。その際、ハムザは行きがかり上、こう言わなければならなかった、「私はマホメットのおじであり、彼の宗教の信者である」と。ハムザは新宗教について何の認識もなかったが、彼の同族意識が、マホメットを守り、アブー・ジャフルを攻撃させたのである。

また、マホメットの家のごみにごみを捨てたりするいやがらせが行われた。彼が礼拝していると、羊の内臓を投げつける者があった。さらに彼が食べようとして食事の皿にきたない物を投げこんだりもした。マホメットは思わずかっとなり、杖をつかんで表へ出て、「これはいったい何たることか」とどなった。いたずら者たちは、彼を逆上させたことに満足して、蔭で笑い、彼の顔に砂を投げかけた。彼が帰宅すると、娘のひとりが顔の砂をきれいに拭いて、涙を流した。彼は娘の涙を拭いてやり、言った、「泣くんじゃないよ、アッラーがおとうさんを守ってくれるからね」と。

一方、血縁集団の保護を受けられない気の毒な人がいた。例えばビラールは、エチオピア出身の黒人奴隷であったが、彼の主人からアブー・バクルが買い取って自由民にしてやった者である。彼は前の主人の家の者によって、メッカの谷間の真昼時、岩を胸にくくりつけられて、焼けつく太陽の下に置かれたという。

集会所となったアルカムの屋敷へ行くのに、地位の低い、あるいは気の弱い者は、夜の闇にまぎれて、塀ぞいに忍び歩かなければならなかった。

ただしコーランを始めイスラム文献は、迫害を誇張している。それは初期の信者の苦難を美化する意図からである。その宗教を支持したか否かで、善人・悪人の区別をするという、宗教文献特有の偏向が見られる。

マホメットをしっかりと保護したのは、Hashim 家の家長 Abû Talib である。彼にとってこの甥は black sheep（黒い羊）であった。¹⁾ つまり羊というおとなしい動物ではあるが、普通の羊が白色なのに、黒いという変わり者であった。ターリブはイスラム教を信じようとはしなかったけれども、あくまで家のために彼を庇い続けた。氏族外から攻撃された者を保護しないのは、

氏族の不名誉とされたからである。

対立は氏族単位のものであった。新興宗教に反対するには、ハーシム家を圧迫する必要があった。そのためメッカの保守派は、この家と取り引きや通婚をしないという、孤立化策をとった。これは2年ほど続いた。しかしたいした効果はあげなかった。その理由として、保守派に強力な統制力が欠如していたこと、および、このボイコットは少数の大商人だけに利益をもたらす、と警戒する者があったことなどが考えられる。ハーシム家は遠隔地や遊牧民との商売はできたし、結婚の問題でも、すでにハーシム家と通婚していた氏族は、急に同家との関係を断つことができなかった。

マホメットが最も信頼する友人アブー・バクルは、この経済的圧力で多少損害をこうむったらしい。彼がイスラム運動に入った時、4万ディルハムの現金を所有していた。彼は何人もの奴隷を購入しては、解放して自由の身にしてやった。ビラールはそのひとり。解放した人数は7人、奴隷1人の代価は400ディルハム、解放の費用は計2,800であった。彼がマホメットと共にメッカを去る時、5,000を手にしていたという。つまりアブー・バクルの場合、 $40,000 - 5,000 - 2,800 = 32,200$ ディルハム、これが主として反イスラム派の経済的圧迫による彼の損失とみられる。これはワットの計算である。²⁾

マホメットの保護者アブー・ターリブの死は、重要である。彼は生涯、預言者を守ったという名誉をイスラム文献に残すことができた。それに反して彼の後継者 Abū Lahab は損な役割を与えられることになった。

アブー・ターリブは死の床にあっても、イスラム教に入信しなかった。その後、ハーシム家長の地位を継いだのは、彼の弟アブー・ラハブである。その妻は 'Abd Shams 家の出である。この家の祖アブド・シャムスは、ハーシム家の祖ハーシムの兄で、当然のこととして両家は競争の立場にあった。アブー・ラハブは最初は兄の志を継いでマホメットを援助しようとしたが、反イスラム派が彼に圧力をかけた。彼らの言うのによれば、マホメットの主張では、アブー・ターリブ、その父アブドゥル・ムッタリブ、その祖父ハーシムたちは、今は地獄に落ちて苦しんでいることになるのだと。アブー・ラハブは行って甥に、それでよいのかと質した。預言者としては、その通りと言わざるをえない。氏族の先祖を侮辱するこの発言を聞いて、保護を取り消すことは、不名誉にはならない。アブー・ラハブはそこでマホメットから手を引くことにした。マホメットとしても、ハーシム家の成員か、イスラム教の預言者か、帰属を明らかにする必要がある。彼が自らの信念を重んじて、血縁を越えた広い連帯を主張するなら、氏族の保護から脱出すべきである。アブー・ターリブの死は、イスラム教団の重要な転機といえる。イスラム文献上、兄弟は善人と悪人にはっきり差別されてしまった。

2 メディナからの誘い

イスラム教団がメッカの血縁集団から独立する時“渡りに舟”と現れたのが、メディナからの誘いである。そこはメッカの北約400キロ、アラビアでは珍しく地下水に恵まれ、5キロ四方ほどの面積に、ナツメヤシや麦、果樹の畑がある。農家は一戸建てでもあるが、多くは集合住宅で、城郭の形をしている。ここはオアシス農村というべきである。中には鍛冶屋や武器職人も住んでいる。貿易もしているが、その規模も重要性もメッカより低い。ここの農業発展に貢献したのはユダヤ教徒である。

ユダヤ教徒の、あるものはイスラエルからの移住者であり、あるものは地元民の改宗者である。彼らは3つの部族から成っていた。有力なのが Qurayzah、Nadir、やや劣るのが Qaynuqa' である。これが劣るとされる理由は、有力2族が農業を営むのに対し、これは耕地をもたず、商業と手工業に従事していた。農村にあって、生産以外の職業の価値は低く見られる。さらには農村自体、その周囲にいる遊牧民からは、下にみられている。アラビアのみならず、農業と遊牧がいりまじる地帯にあっては、移動するものが勇ましいという価値観がある。メディナのアラブ人の主な集団ふたつ、それらは南アラビアのイエーメン出身といわれ、Aws と Khazraj で、後者がより有力であった。

マホメットを勧誘したころ、メディナは沈滞していた。原因はさまざまな集団の間の対立抗争である。個人と個人の間の偶然の争いは、それぞれが属する氏族・部族間の抗争に発展する。もし殺人が行われれば直ちに復讐が起り、またそれに対する報復がなされ、ついには全面戦争になる。この状態はこのオアシス農村に何年も続いており、作物の育成や収穫に被害を与えていた。617年頃に、メディナから2日行程のブアースというところで、この村を二分した大戦争があり、ユダヤ諸族の助けを得たアウスがハズラジを破り、一応の均衡ができた。しかし負けた方が黙っているはずがない。いずれは再び戦争が再発する危険があった。

事態を心配する人物は勿論いた。しかしメディナの住民は誰も、どれかの集団に属しているか、少なくとも、関係ありと見なされており、対立の渦中にある。この事態を改善するには、一段と高い権威をもつ人が諸集団に平和を押しつける必要がある。他の町の住民であって、神の声を聞く超能力の持ち主であるマホメットに白羽の矢が立ったのは、このような事情による。

メディナの信仰はどうであったか。ここの主な祭神は3女神のうちのマナートであった。しかし一方、アッラーを最高神と認める人もおり、さらには十分な意味での一神論者がいて、禁欲生活に沈潜していた。一神論では、価値あるのは個人であり、集団ではない。集団同士の抗争に個人が犠牲になるべきではない。人間はひとりひとり、この世で彼の行為によって審判を受ける。人間は神が創造したもの、従って個々の人間が神の恵みや裁きを受ける。神は特定の部族・氏族にひいきしたりしない。そんなことをするのは下位の神々である。

このような思想的・政治的環境にあって、メディナはたびたび使者を出して、マホメットと話

し合いを重ねた。この村にも預言者の教えに共鳴するものが出てきた。メディナの人には、メッカの商業的繁栄と、その民族の傲慢が、気にさわっていた。他方、マホメットは、先に脱出先としてメッカの東南120キロのターイフを試みて失敗し、絶望していた。彼にとってメディナは因縁がある。彼の父アブドゥッラーは、シリアでの商談から帰る途中、メディナまで来て、そこで病死し、自分の父方の祖母の氏族たるハズラジのアディー家の墓地に眠っている。またマホメットの母アーミナは、メッカのズフラ家の出であるが、少年時代の預言者を夫の親戚たるアディー家のところへ連れて行き、その帰途、亡くなった。預言者も人の子、信仰とは別に、メディナは心の休まる場所であったろう。

3 移住前後

イスラム教徒は少人数の集団に分かれて、逐次メディナを目指して故郷を後にした。メッカの人々は脱出を妨害しなかった。ただ妻子を同伴することは許さなかった。彼らは1年ほど遅れて主人のもとに行くことができた。移動は西暦622年の7、8、9の3か月にわたった。彼らの数は70人といわれ、メディナの信者の世話を受けた。移住を拒否した者も若干あるようで、それらはイスラム教団から離れて行った。

マホメットは信者としては一番あとから、同志アブー・バクルとふたりで出発した。もし真先にメディナに着いたとしたら、孤独な逃亡者のようにわびしい思いをしたであろうし、また、後から信者が続いて来るかどうか心配であったからであろう。彼にとっても、信者ひとりひとりにとっても、永久的に故郷を捨てるには、心の中の葛藤があったに違いない。またメディナが安住の地でなければ、という不安もあったろう。それらを克服すること、これも新しい宗教運動に必要な条件であり、それを乗り越えてこそ成功が得られる。メッカとしては、厄介者がいなくなってほしかったであろう。教団との間に流血事件が起こらなかったことは、両方にとって幸福であった。

これでイスラム教徒とメッカの人間的關係は断絶した。あとは力と力の競争である。メッカで先見の明ある少数の人は、イスラム派がメディナで強力な組織を作れば、メッカにとって脅威になろうと恐れた。

マホメットとアブー・バクルがメディナに到着したのは、9月24日である。村の複雑な対立關係に巻き込まれないため、慎重に公平な入り方を取った。乗っているラクダを自由に進ませ、それが停止した場所を住み家としたのである。さらに重要なことは、いわば着のみ着のままに故郷を後にした信者の生活の問題である。彼ら(Muhājirūn 移住者たち)の数は約70、それを迎えるメディナの信者(Ansār 援助者たち)もほぼ同数であったから、当分は居候の生活をすることもやむをえない。なおイスラム暦(純太陰暦)は、移住開始の初日、622年7月16日から始まる。

メディナで働くとなれば何ができるか。ロダンソンによれば、「アブドゥル・ラフマーンは商売の才能をもっていたが、それは例外であった。このオアシスで土地を買おうにも、余分はなく、人の土地を買う資力もなかった。」³⁾ またワットによれば、「彼らの特技は商業であったけれども、もしシリア方面へ商人団を派遣すれば、メッカのそれと衝突したであろう。また開発可能な土地はあったが、マホメットは信者が農民になれるとは思わなかったであろう。」⁴⁾ 少しの相違はあるが、要するに、彼らは農業の経験がないし、商業のための資本もない。結局はルイスの言うとおり「移住者はメッカの根から断ち切られた人で、メディナでいつまでも居候したくなければ、ただひとつ残る職業は武器を取ることである。“神の使徒”たるものが信者を率いてキャラバンを襲ったことを、ヨーロッパ人は非難する。けれども当時のアラビアの時代的条件と道徳意識によれば、掠奪は自然的かつ合法的な職業であり、それで評判を落とすことはなかった」のである。⁵⁾

掠奪 (razzia < ghazw, ghazwa) について、ワットが行き届いた説明をしている。それはアラブ人の砂漠生活の正常な一特徴であり、戦争というより、一種のスポーツであった。アラブ族の戦争とはもっともっとすごい皆殺し作戦である。この掠奪という行為は、仲の悪い部族のラクダなどの家畜に対して向けられる。女性獲得を目標とすることはあまりない。掠奪隊は、相手の本隊と離れた少数のラクダ群とその荷物をねらって、奇襲をかける。圧倒的勢力をもってするから、襲われた方は抵抗をあきらめる。相手部族の主力が駆けつける前に、掠奪隊はその場から姿を消す。彼ら是对等の兵力の対決をなるべく避ける。味方の集中した力で分散した敵を攻め、敵を恐れさせる戦術を取る。したがって掠奪に伴う人命の損失はおおむね少ない。人命の損失は重大事件であり、厳しい報復を招くから、よほどの怨恨関係でない限り、流血を回避しようとする。もし殺人が偶然によって発生すれば、被害者側が賠償としてラクダを受け取ることが、7世紀初期に習慣となりつつあった。ただし保守的な人は、このことを軽蔑して「血の代わりに乳を受け取る」と評した。⁶⁾

もう一点、重要なことは、このイスラム教団は宗教組織であるだけでなく、生活を共にする団体であることである。故郷の人脈と離れ、新しい土地で教団を保持しなければならない彼らにとって、信仰とは心の奥底に秘めておくものでなく、日々の暮らしと結びついたものであり、したがってその組織は政治団体の性格も帯びている。メディナでの彼らの行動は、はなはだ政治的・軍事的で、まさに「剣かコーランか」である。

イスラム教徒がメディナに落ち着いて1年余りの間、何をしたか。文献には、マホメットがアブー・バクルの娘 'Ā'ishah と結婚したことぐらいしか語らない。

彼らが生活のために行った最初の武力行使は、624年1月、メッカ東南方 Nakhlah においてである。その地を選んだ理由は、その一はそれがメディナから見てメッカの向こう側にあつて、メッカ方が危険をまったく予測しないという虚を突いたことと、二として、以前にマホメットは移住先としてターイフを考え、自身そこへ交渉に行ったが、石を投げつけられ、逃げ帰ったとい

うにがい記憶がある。そのタイフとメッカの間にナフラがある。南方からメッカに入るキャラバンをその地で攻撃することは、彼の復讐欲を満足せざるものであった。

遠征隊の人数は8～12人、すべてムハージルーンである。マホメットがもっとも信頼する仲間である。隊長には封密命令を渡してある。⁷⁾ それは敵に対しては勿論、味方からも秘密を守るためである。東方へ2日進んでから開くよう言い渡されていた。開くと、その地点から南方へ行き、南方からメッカに向かうキャラバンをねらえ、とある。目指す相手をナフラで発見した。時はラジャブ月の末である。この月はイスラム暦第7月、神聖月で、殺生禁止期間である。そしてこの月のうちにキャラバンを攻撃し、護衛の4人の、1人を殺し、2人を捕らえた。1人は逃げた。イスラム教団が惹き起こした最初の流血事件である。神聖月の禁を破ったのは、マホメットの指図か、あるいは隊長の判断か、わからない。うまい具合にこの時に神の啓示が下った：神聖月に戦うのは重い罪であるが、アッラーの道からはずれたメッカ人の罪がもっと重い、と。（コーラン 2章214節）⁸⁾

襲撃隊は、キャラバンの品物と捕虜とともに帰った。戦利品の $\frac{1}{6}$ をマホメットが取り、それが慣例となった。この $\frac{1}{6}$ がイスラム教団の共通財産、のちの国家財産の始まりである。残り $\frac{5}{6}$ は信者に分けた。2人の捕虜はひとり当たり1,600ディルハムの身代金をその家族から取って釈放した。うち1人はイスラムに入信してメディナに留まった。この戦いはイスラム側の勝利、経済的利益となり、他方、メッカ側の反感を刺激する結果となった。

4 バドルでの勝利

ナフラでの敗北はメッカ側にとって衝撃であった。一部の人が予想した通り、マホメット集団の存在はメッカの生命ともいべき貿易に脅威となった。彼を亡き者にしなければメッカ商人は枕を高くして眠れないのである。こう考えたのは、マフズーム家長アブー・ジャフル、メッカでの好敵手である。ナフラから2か月後、メッカのアブド・シャムス家（ハーシムの兄アブド・シャムスを祖とする）の Abû Sufyân を長とする大隊商が、シリアからメッカへの帰途にあった。それにはその町のすべての氏族から、70人（他の史料では30人）が同行していた。運搬する商品の価値は5万ディーナール（1ディーナールは10ディルハム）であったといわれる。一行が無事に到着することをメッカ市民すべてが待ち望んでいた。

メッカ隊商の動向はメディナでも察知した。絶好の目標である。これを襲うメディナの兵力は、300、うち移住者は90人たらず、あとはメディナ人援助者である。この人たちも掠奪行為の経済的恩恵に与ろうとするのである。イスラム軍は預言者みずから指揮して、Badr で隊商を待ち伏せした。そこはメディナの西南にあり、シリアからの路線が紅海に沿って南下して、そこから少し内陸に方向を変えて、メッカに向かう。また道は東北にメディナに通ずる、という地点である。バドルには井戸があり、メッカと地中海地方との交通路線上の要地である。

アブー・スフヤーンは、彼独特の勘によってか、または偵察隊の報告によってか、危険を予知し、メッカに対し「汝らの商品を守るため」に援軍を出すよう求めた。メッカはそれに応じて、950人から成る部隊を編成した。戦う能力のある人間を総動員したのであろう、マフズーム家のアブー・ジャフルが隊長である。キャラバン・リーダー、アブー・スフヤーンとしても、援軍だけを頼りとしな。彼は水不足の不利をあえて忍んでバドル経由の通常路線を避け、できるだけ紅海ぞいに進んだ。そして自分でバドルまで偵察に出かけた。見るとふたりの男がそこへ水汲みに来ていた。彼らが去った後、ラクダの糞を調べると、中にナツメヤシの実があったので、メディナから来たことがわかった。彼らはマホメット側のスパイであったのだ。キャラバンは海ぞいに行進を続けた。

スフヤーンの巧みな指揮によって隊商が無事にメディナの勢力範囲から出られそうになったので、彼は援軍に向かって、メッカへ引き返すことをすすめた。隊商が安全なら、援軍の必要はない。必要なら、それはナフラで殺された男の復讐だけである。それもメッカの名士が紛争防止のために賠償金を出すという。だから一部の者はメッカへ帰りかけた。去る者に向かってアブー・ジャフルは「卑怯者！」と叫んだ。彼はこの機会にイスラム教団を撃滅して自分の功名としたかった。メッカ側の不統一である。一部は去って、メッカ軍の数は600ないし700となった。

マホメット軍は援軍のことはつゆ知らず、バドルの井戸端で待機し続けた。もうとっくにここを通過していなければならない。たまたま水汲みに来た若者を調べると、メッカ人で、キャラバンの動きを聞き出した。メッカ人より先に水場に至り、水を十分に確保したあと、ひとつを残して他の井戸を埋め、彼らの使用を妨げた。

戦術としてはマホメット側が断然すぐれていた。整然たる戦線を保持して、矢の雨を浴びせかけた。それに反し、メッカ軍は個々の氏族がばらばらに戦い、統制が取れていなかった。メッカに向かって進む時、朝の太陽が目まぶしかった。そのうえ水のないことがこたえた。おまけに主な指揮官が戦闘の初期に一騎打で戦死し、全軍の士気は低下していたため、ラクダ700頭、馬100頭を有する優位を生かすことができなかった。

一方、マホメットは側近とともに一条乱れぬ指揮をしていた。戦闘期間中、彼は後方に設けられた小屋の中で、熱心に神に祈り続けた。彼は叫んだ、「我の心をその手に握っている神に誓って言う、今日、この戦場で勇敢に振る舞い、後退することなく、前進するのみの者は、もし倒れても、アッラーは必ずや彼を極楽に導くであろう。」ウマイルという兵士はその時、ナツメヤシを食べていたが、その叫びを聞くやどなった、「そうか、そうか、極楽へ行くには、あの敵に殺されるだけでよいのか。」ナツメヤシを投げ捨て、剣を掴むや、敵兵に向かって突撃してまもなく戦死した。戦闘の結果、メッカ軍は逃走した。戦死者数は隊長アブー・ジャフルを含む45ないし70という。他方、メディナ側の損害は14名（移住者6、援助者8）であった。アブー・スフヤーンの率いる隊商は無事にメッカに到着した。

勝利者イスラム側に戦利品の分配について議論があった。それは直接に手をつけた人の者とな

るのか、後方にいてマホメットを護衛していた者の取り分は何か、である。マホメットは裁定を下し、獲得した物はすべてひとところに集め、この戦争に参加した全員に平等に分配することにした。

捕虜の処置はどうか。乱暴者ウマルは、全員を殺せと言ったが、マホメットは、まず身代金を要求し、払わない者を殺すよう命じた。激しい戦闘の後の興奮からか、彼の感情は激していたようで、捕虜のふたりをその場で釈放させた一方で、他のふたりはメッカで見覚えがあり、かつてイスラム信仰を嘲笑したことがあったので、慈悲を示さず、処刑を命じた。そのひとりの「マホメットよ、我れ亡き後、息子は誰が世話するのか」の問いに対し、彼は冷然と答えた、「地獄が面倒見るさ。」捕虜ひとり当たりの身代金は、本人の資産に応じて、100～400ディルハムであった。

当時のアラビアの戦争のやりかたは、掠奪の場合が奇襲であるのを別として、まず双方から代表がひとりずつ出て一騎打を、何度か行う。これはいわば個人戦で、個人の能力を示す機会である。その後で全軍の対決となり、これは団体戦といえよう。こんなところに戦争におけるスポーツの要素を見ることができる。より組織を重視したイスラム軍の方が進歩的であったといえよう。なおワットは両軍の兵士を比較して、メッカのそれは年齢的に盛りを過ぎた人が多く、これに対しイスラム兵は働き盛りの者であったという。⁹⁾

5 ユダヤ教徒との関係

メディナのマホメットにとってもっとも親密な集団は、彼とともにメッカから来た人々、ムハージルーンであり、それに次いで、メディナの教徒、アンサールであった。この両者が ummah (共同体) を構成する。その他にユダヤ教徒や不信心者がいる。イスラム教徒とユダヤ教徒との関係は間接的で、宗教も経済も別々、という認識であった。マホメットはもともとユダヤ教徒に好意的で、期待をすら抱いていた。彼が受けた神の啓示は遥か昔にユダヤ人が受けたそれと同じであり、彼らの聖書はどれよりも古いからである。

彼がまだメッカにいる間、ユダヤ人というメディナの一神教徒の全面的支持をあてにしていたようである。未知の地へ行こうとする人が抱く幻想である。彼の教団は、ユダヤ教徒とともに、メッカやアラビア全体の不信心者・多神論者に対して、共同戦線を張ることを考えていた。そのころ彼はユダヤの習慣を勉強したらしく、礼拝はユダヤ教の聖地イエルサレムの方向にしたし(後に神の啓示によりメッカへ変更)、またユダヤ人が土曜の休息日の前日に買い物に出る習慣を利用して、金曜を集団礼拝日とし、さらに断食の習慣も採用した。

したがって理論的にはこのふたつの教団が平和共存する可能性があった。ところがメディナのユダヤ教徒はこの政治的支配を求めている。ナツメヤシ栽培を主とする農村としてこの地を開発したのが彼らであるからには、当然の望みであろう。さらにこの地はアラビア全体のユダヤ教

の中心であった。彼らのうちの知識ある者が、マホメットがメッカで受けたと称する啓示を是認することは困難である。一般民衆が物事の是非を判断するに際して、古くから聖書をもつユダヤ教の知識人に頼るのも当然である。新来の無学な男が旧約聖書の生半可な知識を振り回していると、マホメットを非難する人があった。そういう人は彼を偽預言者・政治的危険人物と呼んだ。こうした現実の中で自分の立場をどう決めるか、彼は決断を迫られた。

彼にすばらしい考えが浮かんだ。すなわちイスラム教はアブラハム Ibrahim によって立てられたとするのである。それは真正で純粋な宗教であり、彼以後の預言者たるモーゼやイエスが説いた教え、つまりユダヤ教、キリスト教と一致する。マホメットの教えもそれと同じである、と。イスラム教とユダヤ教の間に相違があるとすれば、それはユダヤ教徒が正しい道を踏みはずしたからであるという。アブラハムは最初に一神論を唱えたひとであり、イスラムの預言者はそれを復活させようとするのであると、マホメットは自分を位置づけることによって、ユダヤの宗教観に対抗することができた。これ以後、コーランはユダヤ教徒の背信と独善を非難してやまない。

イスラム教団は自信をもってユダヤ勢力との実力対決に臨む。それは偶然の小事件を機に発生した。バドルの翌月、624年4月、ある遊牧民女性（その夫はメディナのイスラム教徒）が、カイヌカー族（この地のユダヤ集団の中では比較的弱い）の市場へ行き、自作の農作物を売ろうとした。彼女が鍛冶屋の前に座っていたところ、何人かのユダヤ教徒若者が、彼女をからかい、彼女のかぶりものを取らせようとした。彼女はそれに激しく抵抗した。それを見ていた鍛冶屋の主人は、面白半分にかつと、彼女が立ち上がるとスカートがはずれて、下半身がまる見えになるよう、彼女のスカートに細工した。通行人は笑い、女は怒り狂った。この無礼は彼女とその身内のすべての者の名誉を汚すことになる。たまたまそばに居合わせたイスラム教徒男性が、その鍛冶屋に襲いかかって殺した。そしてユダヤ人若者はイスラム教徒に復讐した。

カイヌカー族の人々は自分たちの城塞の中に避難した。彼らはメディナの同教徒がとりなしをしてくれると、安心していらした。マホメットは兵士を送って城塞を包囲し、外からの食料の供給を禁止した。他のユダヤ諸族はなぜか応援に来なかった。包囲は15日続き、籠城者は降伏した。マホメットは全員を死刑にしようとしたが、ここで仲介がはいった。イブン・ウバイイという人である。

この人物はハズラジ族のアウフ家の出である。彼はブアースの戦いに中立を守り、その際に人質となったユダヤ人を殺害しようという有力者に抗議した。彼はメディナの平和を願っていたのである。メディナには彼を政治的首長に推す人たちがあった。しかし彼はイスラム教に入信した。その真意は何であったか。彼はイスラム運動の高まりを利用して、マホメットを宗教指導者とし、自分は世俗指導者を目指したのかもしれない。あるいは、彼が親しんできたユダヤ教のより純粋な一神的教的性格をイスラム教に求めるといふ、まじめな意図からかもしれない。イブン・ウバイイはカイヌカー族の味方として仲裁にはいり、彼らの生命を救った。ただし財産を残らずイスラム側に渡し、3日以内にメディナを去るという条件つきであった。

6 イスラム教団による虐待・暗殺・大量処刑

バドルの戦いの結果、メッカ側からの捕虜に対して、その多くは身代金を取って釈放した。それを払えない貧者は、マホメットは解放してやったと、アラブ文献は礼賛する。しかしそんな慈愛ばかりでもなかった。捕虜というものは、それを獲得した者が自由にできる。殺すのは勝手だが、それでは身代金は取れない。バドルの時、メッカの一捕虜をムハージルーンが殺した。メッカ時代の怨みを晴らしたのであろう。マホメット自身はふたりの捕虜を殺した（前文、第4章）。その理由は知的基準にもとづくもので、ひとりには彼を非難する歌を作ったからというのであり、他は、ペルシアの物事の話はコーランにある話と同じぐらい正しいと言ったから、である。マホメットは生涯を通じて、暴力による攻撃よりも、言論による批判を恐れた。この方が世論に訴えて、影響がより大であるからであろう。

知的攻撃に抵抗するため、イスラムの預言者は暗殺という手段も敢えて取った。ふたりのメディナ人（男と女と）が彼を風刺する歌を作ったとして、マホメットは彼らを殺させた。犯人は被害者と縁続きの者である。ふたりの歌の大意はともに、メディナがよそ者に支配されるのは不名誉であり、善悪の区別もできない人間（ナフラでの神聖月期間中の襲撃を指す）がその地で王になろうとするのは許せない、というものである。マホメットは事前に暗殺計画を知らなかったかもしれないが、事後にその行為を否定もしなかった。実行者として被害者の近親者を選んだから、復讐の恐れもなかった。

もうひとつの暗殺事件の被害者はカアブという者、その父は遊牧民、母はユダヤのナディール族の出であった。そして身分は母方つまりユダヤに属するとみなされていた。彼がバドルの戦いの後、メッカへ行き、反イスラムの歌を作ってはやらせたことが事件の発端となった。この宣伝に対抗してイスラム側も詩人ハッサーンを起用し、メッカを批判させた。宣伝合戦である。この批判がメッカにこたえたのか、カアブはメディナへ戻らされた。しかし彼は言論によるマホメット攻撃を続けた。マホメットはカアブを除く決心し、5人のイスラム教徒を指名した。そのうちの一人はカアブと乳兄弟の関係にあった。彼らは言葉巧みにカアブに近づいて信用を得た後、彼を夜中に彼の家の近くで殺した。5人ともナディール族と同盟関係にある氏族に属していたから、この場合も復讐は発生しなかった。

他方、イスラム側も暗殺される危険が当然あった。マホメットは常にそれに対する警戒を怠らなかった。メッカのある男が自分の氏族の長に言われて、マホメットの命を狙うことになった。表向きの理由は身代金の交渉ということにして、剣を研ぎ、毒を塗って、メディナへ行き、運よく預言者の前に出ることができた。周りの者は刺客の持つ剣を気にしたが、マホメットは恐れを示さず、客に用件を尋ねた。客は身代金の話だと答えた。マホメットは言った、「わたしはお前の族長に話を聞いている。お前はわたしを殺すつもりだな。」そして彼らの計画を詳細に述べた。刺客は預言者の超能力に感服し、その場でイスラム教に入信した、という話である。

大量処刑事件とは、ユダヤ教徒の最後の有力氏族クライザを征服した際、すべての成人男子数百人を死刑に、女性と子供を奴隷にしたことである。（後文、第9章）。

これらの非人道的行為について、ワットは、マホメットが置かれた7世紀、アラビアという時代、地域、環境の故だとして、弁護する。西洋人的偏見を脱しようとする良心は立派である。それでも彼は「我々が生きている、より優しい、より男性的でない時代」という観点に立って、「宗教指導者」がかかる残虐行為を命令したことに、非難めいた言葉を並べてもいる。つまり20世紀のヨーロッパでは考えられないことだと言わんばかりである。¹⁰⁾ しかしながら、そこでは2度も大戦が行われ、権力者は遥かに大量の殺人を実行して、自らの功績とした。¹¹⁾

なおカアブが母の出身氏族に属するとみなされたこと、つまり父系・母系の問題につき、ワットは言う：アラビア一帯にわたって、母系制から父系制への過渡期にあった。とくにメッカで個人主義思想が発達した。そして財産は、それまでは、共同体の共有であったのが、個人（男性）の私有となり、それを彼が子供に相続させる、という傾向が現れた。メディナでは個人主義がメッカほど進んでおらず、母系制が著しかった、と。また嶋田が「イスラム時代になると、血統はすべて父系でたどられる」というのも貴重である。¹²⁾

7 ウフドの敗戦

バドルの敗北と、アブー・ジャフルの戦死の後、メッカでは当時のキャラバン隊長アブー・スフヤーンが指導的地位につき、メディナへの報復準備にはいった。メディナではユダヤ系詩人カアブが反イスラム感情を鼓舞した。スフヤーンは小部隊を率いてメディナ方面に向かった。その目的は、メッカ人の士気を鼓舞すること、周辺にいる遊牧民に威勢を誇示すること、およびメディナの状況を窺って反イスラム分子がいればそれと提携すること、であった。またこの部隊の出発の秘密は十分に守られたので、メディナの郊外に達するまで、イスラム側は彼らの存在に気づかなかった。砂漠での戦術の訓練である。戦果は少なくともよい。家2軒に火を放ち、畑をすこし荒らしただけで、引き上げて行った。

メディナ側では戦力の強化に努めた。メディナそのものの内部の統制もさることながら、遊牧民でイスラムに協力する者が出てきたことは、意義が大きい。彼らはマホメットにきわめて忠実で、その一部の者は「ムハージルーン（移住者たち）」の称号を授けられた。本来、これは622年夏にメッカを脱出したイスラム教徒を示すもので、その数は100名足らずであったのに、後には名誉ある肩書として与られ、700人になったといわれる。

マホメットは自ら小編成の部隊を率いて、周辺の諸部族に向かった。その意図はメディナとの同盟を求めるか、少なくともメッカに味方しないよう説得することにあった。これは、イスラムに敵対すれば報復するという脅迫を示す心理作戦でもあった。

メッカではシリアへの貿易団派遣を中止した。バドルの敗戦の結果、貿易路線上の諸部族はイ

スラム勢力の優位を見て、メッカよりもメディナを支持することを有利と考えた。メッカ・キャラバンの安全の為には、大部隊の護衛を必要とする、その秘密を維持するのは困難であり、メディナと武力衝突の恐れがある、等々を考慮して、アブー・スフヤーンはキャラバン派遣を断念し、メディナの武力征服に総力を集中した。

この町では、統制が徹底せず、彼と対立する一派があえてキャラバンを出した。メディナではこれを察知して待ち伏せした。メッカ側はバドルの二の舞をさせて、戦争を回避し、危うく逃げ帰った。

Uhud の戦いの経過は次のようである。625年3月11日、メッカの本隊が出発した。途中で参加したものを含め、メディナ到着時の兵力は3,000人、人間ひとりずつにラクダ1頭があてがわれる豪勢さ、また200頭の馬から成る騎兵隊をもっていた。彼らは21日、メディナに達し、その西を回って北側に出、ウフドの丘の南面に陣した。

イスラム軍の兵力は1,000である。マホメットは幹部を召集して作戦会議を開いた。一同の意見は、城塞の集まっている地域にたてこもることであった。当時のアラビアの住居は、現在の西アジア一帯のそれと違いなかろう。幾つかの核家族が氏族をなし、それがひとつの家屋に住む。土と石で作られているから、自然、それは城塞でもある。メディナの中心部ではこの城塞家屋が固まっており、互いに石壁をもつ通路で結ばれている。家の中に食料があるから、この城塞群は優勢な敵の攻撃に対して、長期間持ちこたえることができる。メディナを支配するには、城塞をひとつずつ陥落させるという手間を必要とする。

折しも、畑では麦が穂を出したところで、メッカ軍はそこへラクダや馬を放して食わせた。自分たちの畑が荒らされるのを見たメディナ側の、とくに若者は、名誉を保つために、積極的に攻めて出ることを主張した。マホメットは最初に決定した作戦を捨てて、これに従った。これは判断の誤りである。この時、イブン・ウバイイが何故か部下約300を連れて、戦場を去った。これ以後、彼らは Munāfiqūn (偽善者たち) と非難されることになる。

戦闘の経過としては、歩兵ではメディナ軍が優勢で、メッカ歩兵隊を敗走させた。しかし決定的だったのは、Khālid が率いるメッカ騎兵隊である。イスラム軍は側面と背後をこれに襲われ、大混乱に陥った。「預言者、戦死」の噂が流れ、同軍の士気は地に落ちた。それは誤報であったけれども、マホメット自身、顔や足に何箇所もの傷を受けた。また彼みずから敵兵のひとりに槍を突き立てる、という乱戦となった。結局、戦いは終わり、アブー・スフヤーンは後退を命じた。双方の戦死者は、メディナ側72、メッカ側27で、バドルの時が14対45～70であったのを見ると、メッカはほぼ復讐を果たしたといえる。戦場で優勢であったのに、なぜメッカ軍は引き揚げたか。本来アラビアの戦いは、弓矢と槍を用いて、騎兵・歩兵が広い平野で争うものであった。土と石で築かれた建物を攻撃するには、そのための道具を必要とし、彼らの武器として攻城用のものはなかった。メッカ軍の馬の多くは矢傷を受けていた。この騎兵隊で城塞家屋を破壊することはできない。結局、どちらが勝ったかは、種々の観点から言うことができる。両軍の死者の数

は、周辺の遊牧民に対して、メディナの敗北を印象づけた。メッカは勝ったかという点、そうとも言えない。彼らの目的はイスラム教団を崩壊させることであった。これが達せられなかった点、戦略的失敗ともいえる。イスラム教団内部ではどうか。先のバドルの勝利が神の恩寵であるなら、今回の敗戦は何か、適当な説明がなければならない。神の意図はバドルの後の教徒のおごりをいましめ、逆境に耐えることを教えることにあった、というのが、この戦いについてのマホメットの宗教的結論であった。

まお、メッカにいる時、マホメットを庇ってアブー・ジャフルを叩いたおじハムザが、この戦いで戦死した。彼はメッカ軍のエチオピア人奴隷が投げた投げ槍に刺された。この奴隷は、名はWahshi（野蛮な）、主人のおじがバドルで死に、その仇討ちとしてマホメットのおじを殺せば、自由の身にするという約束をもらい、ハムザを狙っていたのである。アブー・スフヤーンの妻は、彼女の父がやはりバドルで戦死したので、その報復としてハムザの死体の胸を切り開いて肝臓を取り出し、それを嚙んで吐き出した。なお戦死者の耳や鼻を切り取って、血まみれのネックレスを作り、飾りにする女性があったと伝えられる。

8 第2次ユダヤ人追放

一勝一敗の後を受けて、両都はアラビアの支配権を求めて、周辺の遊牧諸部族に向かい激しい多数派工作を展開する。自分の強さと相手の弱さを宣伝するのである。イスラム預言者はこの種の活動の才に恵まれていた。彼のもっとも信頼する側近アブー・バクルは諸部族の内部事情に通じていたらしいから、その助言が有益であったろう。宣伝活動には、自分と相手の関係だけでなく、相手の内部の事情もあり、多少の犠牲を覚悟しなければならなかった。一例として、625年6月“マウーナ井戸の事件”がある。

アーミル族というのがいて、族長と彼のおいが勢力争いをしていた。族長は自らの地位を強化するためイスラムと手を握ろうとし、伝道者の派遣をマホメットに依頼した。同族の全体による合意のないまま、伝道団40人ほどが派遣された。これでは彼らの安全が保証されない。おいの方は伝道団を阻止しようとして、偶然近くにいたスライム族を扇動して、マウーナ井戸付近で彼らを攻撃させた。大部分が殺害されたが、運よく助かったふたりのうち元気な方が、偶然にアーミル族の男ふたりと出会い、自分の同僚の仇として兩人を殺した。ところが後でわかったことには、ふたりとも、アーミル族の中のイスラム派であった。アーミル族の者をメディナの者が殺したのであるから、マホメットはイスラム派2人分の人命賠償金をアーミル族から請求されるという奇妙な立場に立たされた。一方、死んだ40人ほどの賠償をスライム族に要求する権利があったはずであるが、それをしなかったのは、イスラム側に力がなかったからであろう。マホメットは損害を受けた上に、自派の人の死亡の弁償もさせられ、おまけにその金は例のおいの手に渡ったというから、大損害である。

マホメットはアーミル族に払うべき賠償金を作るためにユダヤ人の力を借りようとして、ナディール族のところへ頼みに行った。ナディール族はアーミル族と同盟関係にあった。マホメットにはそのことはわかっていたであろうが、メディナのイスラム教団の必要なお金を、ユダヤ人も負担する義務があると考えた。しかしユダヤ側はその義務を感じなかった。意外にもナディールは支払う旨、通知してきた。それでマホメットは出かけて行き、食事の出されるのを待っていたが、突然そこから離れて去った。その理由を彼が後で語るには、敵が家の屋根の上から彼めがけて石を投げ落とすという、神のお告げがあった、と。

マホメットは使者をナディール族に送り、通告させた。10日以内にメディナを去ること、これに違反すれば生命を保証しない、家財道具を持って行ってもよい、ナツメヤシの収穫の一部を取ることを認める、という内容である。彼らはそれを受諾しようとした。ところが“偽善者”イブン・ウバイイは彼らをそそのかし、抵抗させた。自分も、他のユダヤ諸族も、ガタファーン遊牧族も、みなナディールを応援すると言った。マホメットは軍を率いてナディールの城塞を包囲した。来るはずの援軍は誰ひとり来なかった。マホメットは彼らの畑のナツメヤシの木を切り倒し始めた。“木の中の木”、“アラブ人の母であり、おばである”木をである。全面戦争ならやむをえないことか。15日の包囲の末、ナディール族は降伏を申し出た。それを認める条件は、当然、以前よりきびしくなった。立ち去るにも、ラクダに載せられるだけの荷物に制限し、武器はだめ、ということであった。それにしても彼らの撤退ぶりは派手であった。ラクダに、荷物は勿論、家の戸、柱、梁までも積み、女性は最上の服を着、宝石すべてを身につけて飾った。太鼓を打ち鳴らし、600頭のラクダの列は、100キロほど北方、ハイバル目指して進んでいった。そこは広大なナツメヤシ畑があることによって、アラビアのユダヤ人の一大経済中心であった。彼らはその富で遊牧民を用心棒として雇っていた。ただ彼らには統一的政治組織がなく、それが弱点であった。

ナディール族がメディナに残した武器、ヤシ畑、家屋（の残り物）などは、ムハージルーンの所有となり、これにより彼らはアンサルから経済的に独立することになった。

9 戦略の天才

古今東西を問わず、戦闘に勝つ方策は、味方の力を集中し、敵の分散した力を討つことである¹³⁾。メディナのイスラム勢力撃滅へ向けてのメッカの最後の努力は、627年3－4月に行われた“Khandaq（塹壕）の戦い”と呼ばれるものである。兵力は、メッカの町からはもちろん、遊牧民からのも含めて、10,000といわれるが、個々の部隊の人数を合計すると7,500である。軍馬はメッカから300頭、遊牧民からはほぼ同数であった。遊牧諸部族をメディナ攻撃に勧誘したのは、さきにハイバルに追放されたユダヤのナディール族である。参戦の報酬として、ハイバルのナツメヤシ収穫量の半分を与えると約束した。

これに対しイスラム軍は、歩兵は優秀であるが、騎兵は依然として貧弱で、前年にバドルでメッ

カ軍と遭遇した際、馬10頭しかなかった。兵数は3,000、メッカの半分である。メディナに残る唯一のユダヤ部族クライザは、中立を維持し、戦いに加わらなかった。

前々年のウフドの時、麦畑が荒らされた失敗を繰り返さないよう、メッカ軍到着以前に麦を取り入れてしまった。今回、イスラム軍は防御に専念した。新しい防御方法として塹壕を用いた。メディナのオアシスは、西・東・南の三方を熔岩流が覆っていて、馬の通過ができない。したがって北方だけに壕を掘ればよかった。これはバルシア人サルマーンの家にもとづく。メッカ騎兵隊は壕を渡ることができず、ほんの僅かの兵が渡ることに成功したが、少ない数では役に立たない。夜の闇を利用する試みもメディナ兵の警戒が厳しくて駄目、また数箇所にわたっての同時攻撃も失敗、メッカ歩兵は劣性で使えない。結局、メッカは、クライザ族または偽善者がメディナで“第二戦線”を結成することに最後の期待をかけた。¹⁴⁾

なお偽善者の筆頭というべきイブン・ウバイイは、ウフドの戦いの前に、アイシャの“貞操”問題で預言者と対立し、メディナでの権威を落とし、失意のうちに病死した。貞操問題とは、アブー・バクルの娘でマホメットの妻のひとり、アイシャが、偶然、若い男性と何時間かふたりきりでいたことを、反イスラム派が攻撃したことである。マホメットは妻の貞潔を信じ、教徒の多くもそれを認めたが、メディナにはこのスキャンダルを利用して、イスラム教団を動揺させようとする分子がいたのである。

アラビアの戦術は野戦であって、攻城は彼らの作戦要務令にない。城を破るには道具がいる。扉を打ち破る大きな槌、城壁の上にのぼるための梯子などは、大木から作られる。それは南アラビアにしかない。彼らは個人の精神・技能の争いに勝つことを名誉とする。城塞をなす家屋に籠もって持久に専念することは、アラブ武士道になかった。¹⁵⁾

持久戦は2週間ほど続いた。イスラム軍は北方よりする攻撃をすべて撃退した。メッカ軍の士気は衰え、メッカと遊牧民の同盟がほころび始めた。4月末までに彼らは撤退した。異常寒気と烈風がそれを一層早めた。イスラム教団を崩壊させようとするメッカのクライシ族の最後の努力はむなしく終わった。戦死者の数はごく少なく、メディナ6、メッカ3であったという。

マホメットは敵の力を分散せざることに意を用いた。メッカに加わった遊牧諸族は賄賂をもらったからであることを彼は知っていたから、彼はより多くの賄賂を提案して、同盟からの分離を計った。その賄賂とはメディナのナツメヤシの1/3で、彼らは1/2を要求したが、のちに1/3で承諾した。メディナのアンサール（イスラム教徒を援助した人々）は、このような利害打算の交渉はメディナの名を汚すから、やめるよう主張した。遊牧民の方も欲深さで評判を落とした。ともかくイスラム教団は知能戦によって、敵方の分裂を促進した。

一方ではメディナ内部の一致が問題であった。ユダヤ、クライザ族とイスラム教団との間に何等かの協定があったらしいが、メッカとの戦争に際してクライザはイスラムを支援すべきか、または中立を保つだけでよかったか、はっきりしない。壕を掘る道具を彼らが提供したともいわれる。ハイバルの一ユダヤ人がクライザ族に、イスラムはきっと敗れるだろう、と言った。それを

聞いてクライザは態度を変えた。メッカと同盟しよう、ただもしメッカが負けたら、自分たちがイスラムから報復を受けるから、メッカ、および主な遊牧部族から人質を取っておこう、と考えた。この人質の交渉に時間がかかり、イスラム側の工作員がマホメットの指示に従って交渉を攪乱した。話し合いは合意に達せず、メディナにおける第二戦線結成は失敗した。もしそれが成功し、クライザがイスラム軍の背後を襲っていたら、マホメットの運命は尽きていたであろう。

2度にわたるイスラム征服戦争の失敗は、メッカに大きな打撃を与えた——経済的にも精神的にも。町の指導者層はともかく、一般市民の中にイスラム教への入信を考える人が出ても、不思議ではなかった。

メッカ軍の引き上げを見るや否や、マホメットはイスラム軍に休息の暇を与えず、進撃を命じてクライザの城塞を包囲した。包囲は25日つづいた。メッカの攻勢に屈しなかった自信のゆえに、クライザの態度をイスラムへの反逆とみなし、強硬政策となって現れた。それはまた、イスラム教団の後顧の憂いを無くし、教団に敵対する（かもしれない）集団を威嚇する効果を生んだ。クライザ内部では議論の末、降伏することに決め、条件としてナディール族の場合と同じくするようイスラム側に申し出た。マホメット無条件降伏を要求し、クライザはそれを受け入れた。

ここから双方のかけひきが始まる。先にカイヌカーのユダヤ族を追放した際、その全員が殺されるはずのところ、アラブ、ハズラジ族の出イブン・ウバイイのとりなしで、命は助かったことがある。その再現のつもりで、アラブのアウス族（クライザと同盟関係にあった）が調停にはいろうとした。メディナのアラブはまだまだ気を許せない。アウス内部では、古くからのクライザとの好しみと、新興イスラムへの忠誠と、いずれが重いか議論が分かれた。マホメットはこの成り行きを見て、クライザの運命をその同盟者アウス族の一員にゆだねることにした。それなら彼はユダヤに対する責任を免れることになる。選ばれたのは、アウスの長老で、忠実なアンサール、サアドである。当時、彼は老齢で、しかもハンダクの戦いに負傷して、余命いくばくもない状態であった。彼がマホメットの前に呼ばれて来ると、アウス族はじめ全員が、サアドの決定に従うと誓った。判決は、クライザの男子は全員死刑、女子と子供は奴隷にするという厳しいもので、翌日執行された。裁判官サアドの心境はどうであったか。彼に対してマホメットからの圧力はなかったと見ていい。アウス族では、ユダヤとの長い友好関係と、イスラム共同体と、どちらが優先するかが問題であつた。サアドは断固としてイスラムを取った。もし昔からのつながりを重くみるなら、果てしない部族抗争を再現することになり、マホメットをメッカから招いた意味がなくなる、と考えたからである。かくてイスラム教団は犠牲を払うことなく、アウス族を利用することによって、最後の敵対勢力クライザを一掃することができた。まさに見事なマホメットの戦略である。

10 メッカへの郷愁

メディナにおける地位をゆるぎないものとしたイスラム教団の以後の目標は何か。それは拡大である。その対象として、ひとつは周辺の遊牧諸部族があり、また北方、地中海方面との通商路の確保があった。しかしもっとも重要な目標はメッカである。そこは衰えたりとはいへ、アラビア経済の一大中心で、人材豊富、預言者たちの縁者が住む町である。

マホメットはメッカへ参詣せよという夢を見て、その行動を起こした。夢によってとは何か。夢を見るまでもなく、彼にとってメッカは一日も忘れたことのない町である。夢は偶然性を表す。敵も味方もあざむく行動をするため、夢を利用したのであろう。出発は628年3月13日、従う者、700人ともいうし、また1,400－1,600ともいう。戦闘をするつもりでないから、携帯する武器は剣だけ、それも鞘から抜かないよう言い渡してあった。

メディナの巡礼団は敵の意表をつくため、通常でない道を取り、メッカの騎馬偵察隊をかわし、Hudaybiyahという地点まで来た。気づかれずにどこまでメッカに近づけるか、試してみようというマホメットのいたずら心が窺われる。そこで彼のラクダが歩みをとめた。これ以上進むなという神のお告げであろうと、一同そこで下りた。そこはメッカ神聖地域のひとつの端であった。メッカの西北15キロほどの所で、大木が立っている。

双方から代表が出て、交渉にはいった。内容の要点は次のようである。

1 双方は向こう10年間、停戦する。(故郷の町を平和的に味方につけようとするマホメットの思いやりが感じられる)

2 今年の参詣を来年に延期する。その時、町を3日間明け渡す。(双方の顔を立てるもの。メッカは名を、メディナは実を取った)

3 保護者の同意なしにメッカからメディナへ行く者は、メッカへ送り返す。逆にメディナからメッカへ行く者は、そのままとする。(メッカの感情に配慮したもの、メディナ側の自信を示す)

4 部族も個人もメッカ、メディナのどちらと提携してもよい。(メッカ側の譲歩であり、遊牧諸族が同盟関係をメッカからメディナへ変更することが可能となった)

この協定には、メッカの多神教徒・偶像崇拜者を平和的にイスラム教団に招き入れる見通しがついたマホメットの自信がうかがわれる。

マホメットの交渉相手はメッカだけでなかった。彼について来た部下が不満なのである。戦争に行く、そこで戦利品が得られ、収入になる、と思いこんでやって来た。ところが話し合いだけではもうけにならない。交渉中にマホメットは味方の中で苦境に立った。そこで次にこちらから人を送ることにし、ウスマーン（後の第三代カリフ）をやった。彼は預言者の娘ルカイヤ、次いでウナムの夫。またメッカの名門アブド・シャムス家の出であるから、アブー・スフヤーンと同族で、この町には親戚友人が多い。

その彼がメッカからなかなか戻って来なかった。殺されたのかとみなが不安になり、もし万一戦争にでもなれば全員の命が危ない心配した。この時、マホメットは全員を大木の下に集め、イスラム教に対する忠誠を誓わせた。これは“樹下の誓い”と呼ばれ、これに参加した人の名譽は彼らの子孫にまで及んだ。誓いの内容は、命を賭けて預言者を守り、預言者の考えに従って行動する、というものである。¹⁶⁾ そのうちにウスマーンが陣営に帰って来て、協定の成立がわかり、彼が話す内容をアリー（預言者の娘ファーティマの夫）が筆記し、ここにフダイビヤ協定が成立した。

預言者というものは神と人間の中間に立つ。彼は神の命に従い、また人間の欲を満たさねばならない。フダイビヤからメディナへ帰って6週間後、ハイバルへの遠征に出発した。その目的は、物的収穫のなかった前回のつぐないである。ただし参加者は“樹下の誓い”をした者に限られた。このあたりイスラム預言者は抜け目がない。他の目的はもちろん、そこへ追放されたユダヤ、ナディール族の討伐である。彼らは依然として遊牧諸族の反イスラム活動を援助していた。イスラム軍はハイバルの5つの城塞群をひとつずつ攻め落とし、降伏させた。城攻めはイスラムにとっても得意な戦術ではないが、ユダヤ側に油断があって、水すら十分に貯えておらず、また団結の不足（一部はイスラムの策略による）から、降伏を余儀なくされた。これ以後、アラビアにおけるユダヤ人は、集団としての力を失って政治的に無力となり、ただ個人単位でつましく生活を続けるだけとなった。

メッカでは、ハンダクの戦いの後、アブー・スフヤーンは敗戦の責任を取って引退したが、指導者として彼に代わる人物はなかった。約束どおり翌629年3月、マホメットはメッカ巡礼を果たした。6年半ぶりに帰った故郷の町では、アブー・ラハブはこの世の人でなく、やはり預言者のおじのひとりアッバースが、ハーシム家の長の地位についていた。この人の妻の妹と、マホメットは結婚した。またアブー・スフヤーンの娘も、彼の妻のひとりとなっていた。

その3か月後、ハーリド、'Amr ibn-al-' Ās 両人が入信したことは、イスラム教団にとって意義深い。前者はウフドの戦いのメッカ軍の騎兵隊長で、預言者の死後、シリア戦線で手柄を立て“神の剣”とたたえられる。後者はエジプト征服の指揮官として知られる。

630年1月、イスラム軍1万はメッカ目指して進撃した。アブー・スフヤーンはメッカを代表して、マホメットの前に降伏した。この町の偶像はイスラム教徒の手によって破壊されたけれども、カアバ神殿は尊ばれ、“メッカ”の語は「崇拜の中心」という意味をもって現在も高い価値をもつ。妥協することを知るアブー・スフヤーンと、彼の申し出を受け入れた寛容なマホメットと、二大政治家の功績は絶賛に値する。これに反して、ユダヤ教徒は妥協することなく対決し、全滅させられた。もし彼らがイスラム教と一致点を見出していたら、とワットは推測する、それは一神教の先輩宗教としてイスラムのよき協力者となって、その後の世界史は変わっていたであろう、と。¹⁷⁾ 自分の仲間からマホメットが分離した、という感情においては、メッカとユダヤは同じ立場に立つ。しかしユダヤの場合、その古く長い自尊心の伝統が生活にしみこんで柔軟性を

失い、マホメットを“アラブの成り上がり者”とみなし、預言者と認めることは到底できなかった。それでイスラムと徹底的に対決して悲劇を演じたのである。

時代の変化に対応する思想としてマホメットが唱えた教えは、彼一代のうちにみごとな成功を収めた。その成功は記録されて文献に定着し、後代の規範となった。この規範は生活にも浸透し、年月の経過とともに揺るぎない強さを得た。しかしその反面、柔軟さを失い、現在、時代の変化にいかに対応するかが、問題となっている。

註

- 1) Rodinson, Maxime, *Mohammed*, Pelican Books, 1973, pp111,135. フランス語からの英訳。
- 2) Watt, W. Montgomery, *Muhammad, Prophet and Statesman*, Oxford Univ. Press, 1974, p75. 前稿「マホメット物語－人間として、預言者として－」が Rodinson, *Mohammed* の読書ノートであったのに続いて、本稿はワットのこの書に多くを負っている。この西洋人ふたりの良心と情熱に感動する。牧野信也・久保儀明、みすず書房の訳があるが、理解が不十分である。歴史事実に関するいくつかを挙げる：
an oasis of twenty square miles (p84) 「20マイル四方のオアシス」メディナのこと、20平方マイル、原書・訳書の地図を見ればわかる。
July 16, A.D. 622 (p91) 「6月16日」イスラム暦元日、7月、不注意の誤りであろう。
fields of corn (p136) 「とうもろこしの畑」麦畑、イギリス英語で corn は麦。トウモロコシは南アメリカ原産、7世紀にアラビアに伝わっていたか？
a largely homogeneous society (p152) 「〔母系制から父系制への移行期にある〕社会とはほぼ同種」アラビア以外の或る社会と似ているのでなく、アラビア内部はほぼ同質で、ただメッカはより父系的、メディナはより母系的という相違があった。
'second front' (p171) 「第二の戦線」、下の註(14)参照。
- 3) Rodinson, *op. cit.*, p161.
- 4) Watt, Muhammad, *Cambridge History of Islam*, 1, 1970, pp41-2.
- 5) Lewis, Bernard, *The Arabs in History*, Hutchinson Univ. Library, 1968, p44. 林武・山上元孝、みすず書房の訳は無数の誤訳を含む。初歩的誤りのいくつかを示す：
In A.D.575 an expedition from Persia invaded the country, (p25)
「紀元前 575年、ペルシアの遠征軍がこの地に上陸し」
(ササン朝ホスロウ1世の南アラビア侵入のこと、紀元後。ここだけ後で訂正)
The city of Medina, some 280 miles north of Mecca, (p40)
「メディナの町は、メッカの北東およそ280マイルほどのところにあり」
(メディナはメッカの真北、わずかに西寄り)
ninth-century Arabic essayist Jāhiz (p81)
「19世紀のアラブの随想家ジャーヒズ」(ジャーヒズ ca.776-868/9)
Paper was first made in China in the year 105 B.C. (p87)
「紙は紀元前105年にシナで造られた」(紙の発明は紀元後105年、原著者の誤り)
- 6) Watt, *Muhammad, Prophet and Statesman*, pp105-6.
- 7) 英語で sealed order, 日本海軍の封密命令について、草鹿龍之介『聯合艦隊』毎日新聞社、1952年にいう：真珠湾攻撃のことは、聯合艦隊麾下の各長官・幕僚といえども、一向知らなかった。実際にこの作戦に当たった機動部隊将兵にしても、単冠(ひとかつぶ)湾で初めて封密命令で知った次第である。封密命令とは、何日何時、もしくはどこに至って開封すべし、というのである。世間一般から考えると、まことに頼りないように思われるであろうが、軍紀の厳重な海軍ではよく守られ、相互信頼は絶対であった、と。
- 8) 井筒俊彦『イスラーム生誕』人文書院、1979年 174頁にいう：イスラームの現実主義は、メディナ期に入ってから

啓示の質的变化に最も具体的な形で現われている。ここでは宗教はたんに実存様態としての宗教ではもはやない。それは誕生したばかりの新教団、共同体の宗教である。組織的な構成をもつべき共同体の宗教であるかぎりには、イスラームはその根本的精神にもとづいて、神にたいする人間という観点から、共同体の成員のあり方を厳格に規定しなければならない。共同体そのものの存在がゆるぎない法的・政治的・倫理的基礎の上にうち立てられなければならない、と。神聖月の戦争を是認したり、礼拝の方向を変えさせたり、この時期の啓示は大いに政治的である。啓示がメッカ期は無意識の産物であつたが、メディナ期には意識の世界のものとなったと言えるか。

- 9) Watt, *op. cit.*, p124.

なお一騎打 single combat は、イスラーム以前、ササン朝でも行われていた。「合戦においては、一騎打の風習があり、両軍が相い対峙し、集団が激突・交戦するまえに、双方から力量のひとしい選手2人が出て決闘が行われた。」世界の歴史 9『ベルシア帝国』(足利惇氏執筆)講談社、1977年。

- 10) *Ibid.*, pp123, 129, 173.

- 11) ガルブレイス、ジョン・ケネス、鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』岩波書店、1960年、22頁にいう：最近の2回の大戦についてみても、戦敗国や戦災国をも含めて、西欧諸国の生活水準は、戦後数年で戦前よりも高くなった。これに対して中東の経済生活は、ジンギスカンによる度を越えた組織的な破壊と略奪と大虐殺から回復したことはない、と。アジア史の知識に乏しい西洋人の常識を示したものとして、興味ある。学者による正論の一例を以下に示す。

Lewis, *The Middle East and the West*, Weidenfeld and Nicolson, 1968, p12:

The immediate impact of the Mongol conquests was certainly great; their subsequent effects have been much exaggerated. At one time, Mongol brutality was blamed for the decline of Islamic civilization and, indeed, for all the failings of the Middle East and its peoples between the thirteenth and nineteenth centuries. Outside romantic and apologetic circles, this view has been generally abandoned, as increased knowledge of Islamic history on the one hand, and closer experience of brutality and destruction on the other, have shown us that the damage done by the Mongols was neither as great nor as lasting as it seemed to historians of a more innocent age than our own.

ガルブレイスは世界的に著名な経済学者であるが、モンゴル史については素人で、「空想的・護教的」な人といえよう。「残虐と破壊を身近に経験した」とは、2度の世界大戦や、ナチによるユダヤ人殺害などを指すか。

- 12) Watt, *op. cit.*, p152. 嶋田襄平『マホメット』清水書院、1975年、38頁。

- 13) 日本陸軍の作戦要務令(1938年)の冒頭、第二にいう：戦捷ノ要ハ有形無形ノ各種戦闘要素ヲ綜合シテ敵ニ優ル威力ヲ要点ニ集中發揮セシムルニ在リ。また第七には：協同一致ハ戦闘ノ目的ヲ達スル為極メテ重要ナリ、と。

- 14) 第二戦線 second front, Watt, *op.cit.*, p171. 敵を牽制し、その戦力の分散を計るため、主作戦方面以外に設ける戦線をいう。ヨーロッパで、第一次大戦のバルカン、第二次の南ヨーロッパ戦線がこれに当たる。平凡社、世界大百科事典「だいにせんせん」、また東京創元社、西洋史辞典「第2戦線」

- 15) 当時の戦術についてワットの記事を引用する。Watt, *op. cit.*, It was in keeping with Arab custom to try to impress the other side without actually having to fight them (p121). これは圧倒的に優勢な兵力で戦わずして相手を降伏させることをいう。Set battles were not in the Arab tradition of fighting (p141). set は形容詞で、pitched の意、set battle, pitched battle とは、両軍が互いに相手の様子を知った上で対戦すること。奇襲、待ち伏せなどに対する。Sieges were unknown in Arabian warfare (p168). siege は、城などに立て籠もる敵を攻めること。野戦の対。

イブン・ハルドゥーン、森本公誠訳『歴史序説』巻1、岩波書店、1979年、第2章〔25〕にいう：砂漠のアラブ族は、その野蛮性による掠奪もしくは危害の民であって、決戦することなく、危険に身をさらすようなこともなくて、可能な範囲の掠奪を行い、ついで砂漠の遊牧地へ退却する。自衛するとき以外は戦闘を行わない。要塞など難攻と思われる所は避け、もっと容易なところを通り、これを攻撃しようとはしない。このアラブ族は険阻な山岳を横切ることができず、困難を冒して危険な目に遇うようなことをしないので、もし近寄りがたい山脈などによって守られている部族は、彼らの危害や破壊行為を受ける心配がない。一方、平原では、守備軍がいなかったり、政府の権力が弱かったりして、縦横に振舞える場合は、その平原にあるものはまったく彼らの好餌となる。疾駆・掠奪・攻略をやすやすと繰り返し、ついにその住民は彼らに屈服してしまう、と。

- 16) 苦境にあって主君に忠誠を誓う話は、モンゴル史で元朝秘史巻6と元史太祖本紀に“バルジュナ湖畔の誓い”としてある。ケレイト族との戦いに不利となったジンギスカンは19人の部下とともにバルジュナ湖のほとりに至り、濁った水を

飲んで、主従の協力を誓いあった。この濁水を飲んだ者は“バルジュナ功臣”という名誉を得た。小林高四郎『ジンギスカン』（岩波新書）71頁。なおジュワイニーやワッサーフによるペルシア語史料もこの話を載せている。

- 17) Watt, *op. cit.*, p191.

(1994年4月1日 受理)